

力士考

— 考古資料分析による扁平髻の解釈 —

人間社会環境研究科 人間社会環境学専攻

基 峰 修

要旨

力士は、『日本書紀』巻第6垂仁天皇7年7月条に、野見宿禰と力比べをした当麻蹶速を「天下之力士」と記されていることから、世に名の響いた強力の者の呼称と理解できる。力士の研究は、相撲（角力）との関わりが深いことから、相撲史の一角として扱われてきた。考古資料を対象とした研究では、力士埴輪が専らその対象として扱われてきた。力士埴輪の特徴として通説化しつつあった扁平髻に関しては、具体的な検討は行われてこなかったが、近年、仮面を付けた相撲人の姿であるとの見解が示され、系譜をめぐる解釈も含めて再考の必要がでてきている。

本論では、力士埴輪特有の扁平髻に注目して整理・分析を行い、古墳での造立状況からその性格を検討したうえで、高句麗壁画古墳に描かれた力士図の髪型との比較検討を行った。共通点と相違点を明らかにすることで、扁平髻に関する新たな解釈を試みた。

検討の結果、5世紀から6世紀にかけて造立された個々の力士埴輪の性格の特質（守護・瘵邪の役割）に相違はなく、首長に属する部民でありえたと想定できた。性格の特質については、高句麗壁画古墳の石室天井を支える力士図との共通点であることが窺えた。また、禪に半裸身の容姿に関しても、高句麗壁画古墳の角抵図や手搏図及び天井を支える力士図との共通点であることが理解できた。頭髮に関しては、高句麗壁画古墳の角抵図や手搏図及び天井を支える力士図では結髻で、特に天井を支える力士図では、力士埴輪の扁平髻を正面から見たのと酷似して描かれているものがあることが理解できた。

文献史料や他の考古資料から、力士の頭髮や相撲の渡来に関連する事項は認められないが、本論の比較検討の結果では、禪に半裸身といった容姿の共通点のほかに、扁平髻といった頭髮の表現に渡来文化としての根拠が見いだせることを指摘した。力士埴輪の扁平髻は、相撲が、渡来芸能であることの反映といえる。

キーワード

力士埴輪、扁平髻、高句麗壁画古墳、渡来文化

A Study of the *Rikishi*

—An Interpretation of the *Henpei-mage* Based on Archaeological Analysis—

KIMINE Osamu

Abstract

According to the *Nihon-shoki* (the oldest chronicles of Japan), *rikishi* was a designation for strong men of great repute. The study of the *rikishi* is deeply connected with sumo wrestling and has been treated as the history of sumo. Archaeological research on *rikishi* has studied the *rikishi haniwa* (terracotta figures depicting a *rikishi*). The *henpei-mage* (flat topknot hairstyle), characteristic of the *rikishi haniwa*, has never been examined substantially. However, in recent years, an opinion has emerged that it is the figure of the sumo wrestler wearing a mask; thus, it is necessary to re-examine conventional understanding of the *henpei-mage* including the interpretation around archaeological genealogy.

In this paper, I analyze the *henpei-mage* of the *rikishi haniwa* and examine its character based on how mounded tombs were constructed. I then compare it and the hairstyles of *rikishi* depicted in mural paintings of the mounded tombs of Koguryō. By clarifying their similarities and differences, I attempt a new interpretation of the *henpei-mage*.

Based on this examination, it is thought that the *rikishi* was a hereditary social group attached to the local elite. The evidence that the hereditary social group and the sumo came across the sea is not seen in documented historical materials and other archaeological documents. However based on the comparative analysis in this paper, I point out that its evidence is not only the figure, a loincloth and half-nakedness, but also the *henpei-mage* hairstyle that are common to both. I conclude that the *henpei-mage* of the *rikishi haniwa* is a reflection of sumo being the imported performing arts.

Keywords

Rikishi haniwa, *henpei-mage*, Koguryō mounded tombs with mural paintings, culture transmitted from overseas

1 はじめに

力士は、『日本書紀』巻第6垂仁天皇7年7月条で、野見宿禰と力比べをした当麻蹶速を「天下之力士」と記していることから、世に名の響いた強力の者の呼称であったと理解されている。

力士の研究は、相撲（角力）との関わりが深く、切り離して考えることが出来ない関係にあることから、相撲史の一角として取り扱われてきた。相撲史では、『日本書紀』の記述を根拠に、野見宿禰がその始祖として扱われてきた⁽¹⁾。一方、力士

埴輪及び相撲小像の付いた装飾付須恵器壺を分析対象とした考古資料の検討では、和歌山県和歌山市に所在する全長88mの前方後円墳である井辺八幡山古墳の発掘調査を実施した森浩一が、出土した力士埴輪の考察にあたって、日本の古代相撲の源流は、東アジアの北方文化、特に高句麗文化の関連のもとに発生したものとみなし、死者の鎮魂のための葬儀に関連する性格を有していたと指摘⁽²⁾する。この指摘は、古代の力士及び相撲を考察する上で、非常に重要な指標といえる。

以後の考古資料を対象とした研究は、青木豊に

よる力士埴輪の紹介⁽³⁾と、森貞次郎による東アジア世界での伝播とその流れの明確化⁽⁴⁾が行われ、力士は、裸体裸足禪の姿が東アジアでの共通した特質であることが示された。力士埴輪に、中国・朝鮮の影響が見られることに関しては、塚田良道による指摘⁽⁵⁾もある。

一方、力士埴輪には「冬の太陽の強さの復活、豊作の予祝を願う」との指摘⁽⁶⁾もあり、山内紀嗣は、力士埴輪及び格闘像（相撲小像）の付いた装飾付須恵器壺の分析から、相撲が古墳の墳丘上で執り行われていたことを想定し、その性格は豊穡をもたらす農耕儀礼であったとの見解⁽⁷⁾を示した。

力士埴輪特有の扁平鬘に関しては、鈴木徹が、力士埴輪の性格分析に際して重要であることを指摘⁽⁸⁾しており、亀井正道は、扁平鬘が力士埴輪の特徴のひとつであることを述べている⁽⁹⁾。駒宮史朗は、扁平鬘が力士固有の髪型であって、力士は髪型にその特徴があることを述べるとともに、「懲悪・癖邪・鎮魂・慰霊」等の言葉で括られる職掌を有していたとの見解を提示⁽¹⁰⁾する。さらに、力士埴輪を中心とした特別展が開催される⁽¹¹⁾にあたって、若松良一は、力士特有の髪型として通説化しつつあった扁平鬘を、仮面（布製仮面）を付けた相撲人の姿であったとの異論を提示⁽¹²⁾した。

近年では、力士埴輪を北方系（北東アジア）の文化要素とする指摘⁽¹³⁾のほか、扁平鬘が革製の髪飾りである可能性が高いことの指摘や、相撲の起源を中国・朝鮮に求めることに否定的な意見⁽¹⁴⁾もある。

力士の性格に関しては、長谷川明による南方系の隼人説⁽¹⁵⁾や、井辺八幡山古墳出土の力士埴輪を分析対象とした冨加見泰彦による海人説⁽¹⁶⁾等がある。井辺八幡山古墳出土の力士埴輪をめぐっては、海人説を支持する見解⁽¹⁷⁾のほか、古墳時代に固定的な職掌集団としての力士の存在を指摘することは困難であるといった見解⁽¹⁸⁾も示されている。

力士に関する考古資料を対象とした研究では、専ら力士埴輪がその対象として扱われてきた。力

士の特徴のひとつとして通説化しつつあった扁平鬘に関しては、特に具体的な検討は行われてこなかったが、仮面を付けた相撲人の姿との見解が示され、その系譜をめぐる解釈も含めて再考の必要があるものといえる。

本論では、力士埴輪特有の扁平鬘に注目して整理・分析を行い、古墳での造立状況からその性格を検討したうえで、高句麗壁画古墳に描かれた力士像の髪型との比較検討を行いたい。扁平鬘の力士埴輪と高句麗壁画古墳の力士図との比較によって、その共通点と相違点を明らかにすることで、扁平鬘に関する解釈を試み、力士埴輪の有する性格分析を基軸に、渡来文化としての系譜をめぐる問題の見極めを行っていききたい。

2 文献史料の紹介

日本の相撲史では、『日本書紀』巻第6垂仁天皇7年7月条で見られる野見宿禰と当麻蹶速の力比べの記述がよく引用され、力比べて勝った野見宿禰が、日本での相撲の始祖とされてきた⁽¹⁹⁾。まずは、『日本書紀』に記述された力士及び相撲に関連した主な記事を抜粋して紹介し⁽²⁰⁾、考古資料を中心とした力士像の分析と検討の一助としたい。

[史料1] 巻第6垂仁天皇7年7月条

左右奏言、当麻邑有勇悍士。曰当麻蹶速。其為人也、強力以能毀角申鉤。恒語衆中曰、於四方求之、豈有比我力者乎。何遇強力者、而不期死生、頓得爭力爲。天皇聞之、詔群卿曰、朕聞、当麻蹶速者天下之力士也。若有比此人耶。一臣進言、臣聞、出雲国有勇士。曰野見宿禰。試召是人欲当于蹶速。即日、遣倭直祖長尾市、喚野見宿禰。是野見宿禰自出雲至、則当麻蹶速与野見宿禰令拵力。二人相對立、各拳足相蹶。則蹶折当麻蹶速之脇骨、亦蹈折其腰而殺之。故奪当麻蹶速之地、悉賜野見宿禰。是以其邑有腰折田之縁也。野見宿禰乃留仕焉。

(左右奏して言さく、当麻邑に勇悍の士あり。当麻蹶速と曰ふ。其の為人、強力くして能く角

を毀き鉤を申ぶ。恒に衆中に語りて曰く、四方に求めむに、豈我が力に比ぶ者有らむや。何とも強力者に遇ひて、死生を期はず、頓に争力すること得てむといふとまをす。天皇聞しめしめて、群脚に詔して曰はく、朕聞かく、当麻蹶速は天下の力士なりと。若し此に比ぶ人有らむやとのたまふ。一臣進みて言さく、臣聞るに、出雲国に勇士有り。野見宿禰と曰ふ。試に是の人を召して蹶速に当せむと欲ふとまをす。即日、倭直が祖長尾市を遣し、野見宿禰を喚す。是に野見宿禰、出雲より至りしかば、当麻蹶速と野見宿禰とに拵力せしむ。二人相対ひ立ち、各足を挙げ相蹶う。則ち当麻蹶速が脇骨を蹶え折り、亦其の腰を踏み折りて殺す。故、当麻蹶速が地を奪りて、悉に野見宿禰に賜ふ。是を以ちて、其の邑に腰折田有る縁なり。野見宿禰は乃ち留り仕へまつる。

この史料から前章で記したとおり、強力として名前が知れわたるものを「力士」と呼んでいたことが理解される。当麻蹶速と野見宿禰、強力の二人が向き合っ立ち、実施した力比べを「拵力」といい、相撲が、角力とも書かれる由縁といえる。力比べに勝った野見宿禰は、帰らずにそのまま留まって朝廷に仕えたたとある。このことは、力士が、朝廷の配下に属したのものとなったことを意味し、部民として位置づけられる存在でありえたことが十分に考えられる。

[史料2] 卷第14雄略天皇13年9月条

木工猪名部真根以石為質、揮斧斷材。終日斷之、不誤傷刃。天皇遊詣其所、而怪問曰、恒不誤中石耶。真根答曰、竟不誤矣。乃喚集采女、使脱衣裙而著犢鼻、露所相撲。於是真根暫停仰視而斷。不覺手誤傷刃。
 (木工猪名部真根、石を以ちて質として、斧を揮りて材を斷る。終日に断れども、誤りて刃を傷はず。天皇、其の所に遊詣して、怪しび問ひて曰はく、恒に誤りて石に中てしやとのたまふ。真根答へて曰さく、竟に誤らじとまをす。乃ち采女を喚集へて、衣裙を脱きて犢鼻を著け、露所に相撲とらしむ。是に真根、暫停め仰

ぎ視て斷る。不覺ずして、手誤ち刃を傷ふ。)

この史料では、采女を呼び集めて衣服を脱がせ、禪を着けさせて、相撲をとらせたとの記述がある。木工猪名部真根を誘惑するために、女性を裸にした雄略天皇の悪意が見られるが、それを不自然ではなく行うために采女に相撲をとらせたのだから、相撲が裸で禪を着けて行うのが一般的であったと言えよう。

[史料3] 卷第24皇極天皇元(642)年7月条

饗百濟使人大佐平智積等於朝。(略)乃命健兒、相撲於翹岐前。智積等宴畢而退、拜翹岐門。
 (百濟使人大佐平智積等に朝に饗へたまふ。(略)乃ち健兒に命せて、翹岐が前に相撲とらしむ。智積等、宴畢りて退で、翹岐が門を拜す。)

百濟の使者である大佐平智積らを朝廷で饗応し、健兒に命じて翹岐の前で相撲をとらせたとある。続けて、智積らは宴会が終って退出してから、翹岐の門を拜礼したともあり、2ヶ月ほど前の元年5月条に、「翹岐從者一人死去。」「翹岐兒死去。」といった翹岐の從者1人と翹岐の子が立て続けに亡くなったことが記されていることと関連づけて、厚遇する百濟の使者への相撲の披露は、相撲が葬送儀礼と結び付いた性格を有するものであったと解釈されてきた。森浩一の考察⁽²¹⁾の根拠となった記述である。

[史料4] 卷第29天武天皇11(682)年7月条

隼人多来貢方物。是日、大隅隼人与阿多隼人、相撲於朝廷。大隅隼人勝之。
 (隼人、多に来て方物を貢る。是の日に、大隅隼人と阿多隼人と、朝廷に相撲る。大隅隼人勝つ。)

隼人が大勢して来朝し、産物を献上したうえに、大隅隼人と阿多隼人が朝廷で相撲をとって、大隅隼人が勝ったことが記される。相撲には、朝廷での披露という格式的な性格を有する一方、地方集団の催事等でも執り行われていたことが窺える。

以上、『日本書紀』に見える力士・相撲関連の記事を見てきたが、史料1・2によれば、古くか

ら力士は、朝廷の配下に属し、相撲は、裸に褌を着けて執り行われたことが理解できる。さらに、史料3からは、相撲の有する葬送儀礼的性格が瞥見でき、その呼称も健児へと変わっている。史料4では、朝廷のみならず、地方でも相撲が執り行われていたことがわかる。また、『日本書紀』では、髪型に関する記載は、特にみられない。

3 考古資料による力士の分析と検討

次に、本論の中心となる考古資料に基づく力士像の分析と検討を試みたい。

(1) 扁平髻の力士埴輪 (表1・図1～3・グラフ1～3)

力士埴輪と称される人物埴輪は、九州地方に存在する石人像を除くと、日本列島の中で31例程の存在が知られる⁽²²⁾。その中で、頭部が残存して、髪型が判明(推定)できるものは、23例(力士埴輪全体の約74%)である。髪型は、扁平髻又は一文字髻と呼ばれるものが約83%といった大多数を占め、力士埴輪の特色といわれてきた(表1・グラフ1)。古墳時代中期のものをI期(5世紀)、後期のものをII期(6世紀)とした編年(時間軸区分)に基づき、先ずはその内容を述べたうえで、分類整理を行いたい。

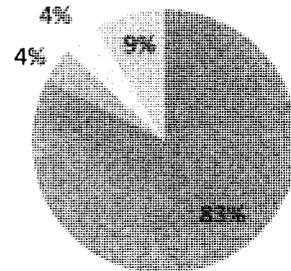
I期(5世紀)

5世紀後半に位置付けられる資料としては、近畿地方では四条2号墳(奈良県橿原市)⁽²³⁾、関東地方では保渡田Ⅶ遺跡(群馬県高崎市)⁽²⁴⁾出土のものが知られる。

四条2号墳は全長42mの帆立貝式古墳で、扁平髻の右側の一部が残存する力士埴輪の頭部～上半身が出土している。立体的に表現された耳の上に、扁平髻が見られる。右腕を挙げる姿勢をとり、腕には輪と手首付近に結び紐付きの輪が付けられる。顔面に並行する縦方向の線刻が8条施されており、入れ墨の表現と理解されている。上半身は裸で、お腹が張り出すようなスタイルである。足玉付きの脚部が出土しており、全身像であったこ

グラフ1 力士埴輪の髪型比較

■ 扁平髻 ■ 板状結髪 ■ 角髪 ■ 坊主状



とが推定できる。

一方、保渡田Ⅶ遺跡は、保渡田古墳群を形成する3つの前方後円墳のひとつである全長213mの井出二子山古墳(群馬県高崎市)⁽²⁵⁾の北側に位置し、形象埴輪の集中配列区画あるいは帆立貝式古墳と考えられている。扁平髻の力士埴輪2体が出土しており、うち1体は右腕を挙げて左腕を下げる姿勢をとる。髻や顔面と首・腕に赤彩が施されている。

5世紀末頃に比定される資料では、近畿地方の四条1号墳(奈良県橿原市)⁽²⁶⁾、東北地方の原山1号墳(福島県泉崎村)⁽²⁷⁾出土のものがある。

四条1号墳は一辺28～29mの造り出し付方墳(造り出しを含めた全長は38m)で、扁平髻の右側の一部が残存し、頭頂部から左側にかけて髻の剥離痕がよく残る力士埴輪の頭部と、手捏ね状に成形された扁平髻を結う力士埴輪の頭部の合計2体が出土している。台部(器台)に乗った素足表現の脚部(足玉付き)も出土しており、全身像であったことが推定できる。

原山1号墳は全長22mの前方後円墳で、後円部南端の周溝内で出土した盾持人物埴輪の東約1m付近から扁平髻の力士埴輪2体以上が出土している。うち1体はほぼ完全な形の全高62cmの双脚立像で、右腕を挙げて左腕を腰にあてた、土俵入りを連想させる姿勢をとる。褌を締め、髻や顔面と首・腕に赤彩が施されている。

類似する姿勢をとる扁平髻の力士埴輪は、出土地不明ではあるが、関東地方の北関東(埼玉県南

いしは群馬県)から出土したものと考えられるものがある。旧長瀨総合博物館(埼玉県長瀨町)に所蔵されていたもの⁽²⁸⁾で、全高68cmの双脚立像で、右腕を挙げて左腕を腰にあてた、土俵入りを連想させる姿勢をとり、禪を締めている。

II期(6世紀)

6世紀初頭に比定される資料では、関東地方の三味塚古墳(茨城県行方市)⁽²⁹⁾出土のものがある。三味塚古墳は、全長85mの前方後円墳で、扁平鬘の力士埴輪の頭部が出土している。他に禪の部分が出土しており、双脚立像であったものと考えられる。顔面と頭部、禪に赤彩が施される。

6世紀前半では、近畿地方の今城塚古墳(大阪府高槻市)⁽³⁰⁾、大谷山22号墳(和歌山県和歌山市)⁽³¹⁾や井辺八幡山古墳(和歌山県和歌山市)⁽³²⁾、北陸地方の帝釈寺4号墳(福井県美浜町)⁽³³⁾、九州地方の荒神森古墳(福岡県北九州市)⁽³⁴⁾、中村双子塚古墳(熊本県山鹿市)⁽³⁵⁾出土のものが知られる。

今城塚古墳は、全長350mの大型前方後円墳で、真の継体天皇陵(大王墓)と考えられている。内堤の北側に200体以上の形象埴輪で構成される埴輪儀礼空間(埴輪祭祀場)が設けられ、その最も南側の区画に扁平鬘の力士埴輪4体が配列される。左腕を挙げて手の平を開き、右腕を下げる姿勢をとり、禪を締める。ほぼ完形の全身像である2体によれば、台部(器台)に乗る両足は裸足で、両脚には結び紐が見られる。両方の腕に、鈴付き飾り紐(手玉)を着けたものもある。

一方、大谷山22号墳は、岩橋千塚古墳群を構成する山頂部に築かれた全長80mの前方後円墳で、逆三角形を呈する顔面とその頭部に扁平鬘がみられる力士埴輪の頭部が出土している。

また、全長88mの前方後円墳である井辺八幡山古墳では、扁平鬘や禪の一部が残存する。台部(器台)に乗る裸足の両脚や、ほぼ完形の双脚全身像である顔面に入れ墨と頭部に鉢巻き状の表現が施された力士埴輪の存在から、扁平鬘の力士埴輪も双脚全身像であったといえよう。

帝釈寺4号墳は、全長40m前後の前方後円墳になることが指摘されており、扁平鬘の力士埴輪の

頭部が見つかっている。

荒神森古墳は、墳長67mの前方後円墳で、同様に扁平鬘の力士埴輪の頭部のみが見つかっている。鬘に1条の線刻が見られる。

中村双子塚古墳は、推定全長60~70mの前方後円墳で、頭部のみが出土する。中村双子塚古墳から出土したものは、円形粘土板による耳の後方から扁平鬘が表現され、その正面と背面に竹管状工具による円形施文が見られ、赤彩が施されている。

6世紀中頃になると、近畿地方の昼神車塚古墳(大阪府高槻市)⁽³⁶⁾、稲葉山10号墳(京都府福知山市)⁽³⁷⁾から出土したものが知られる。

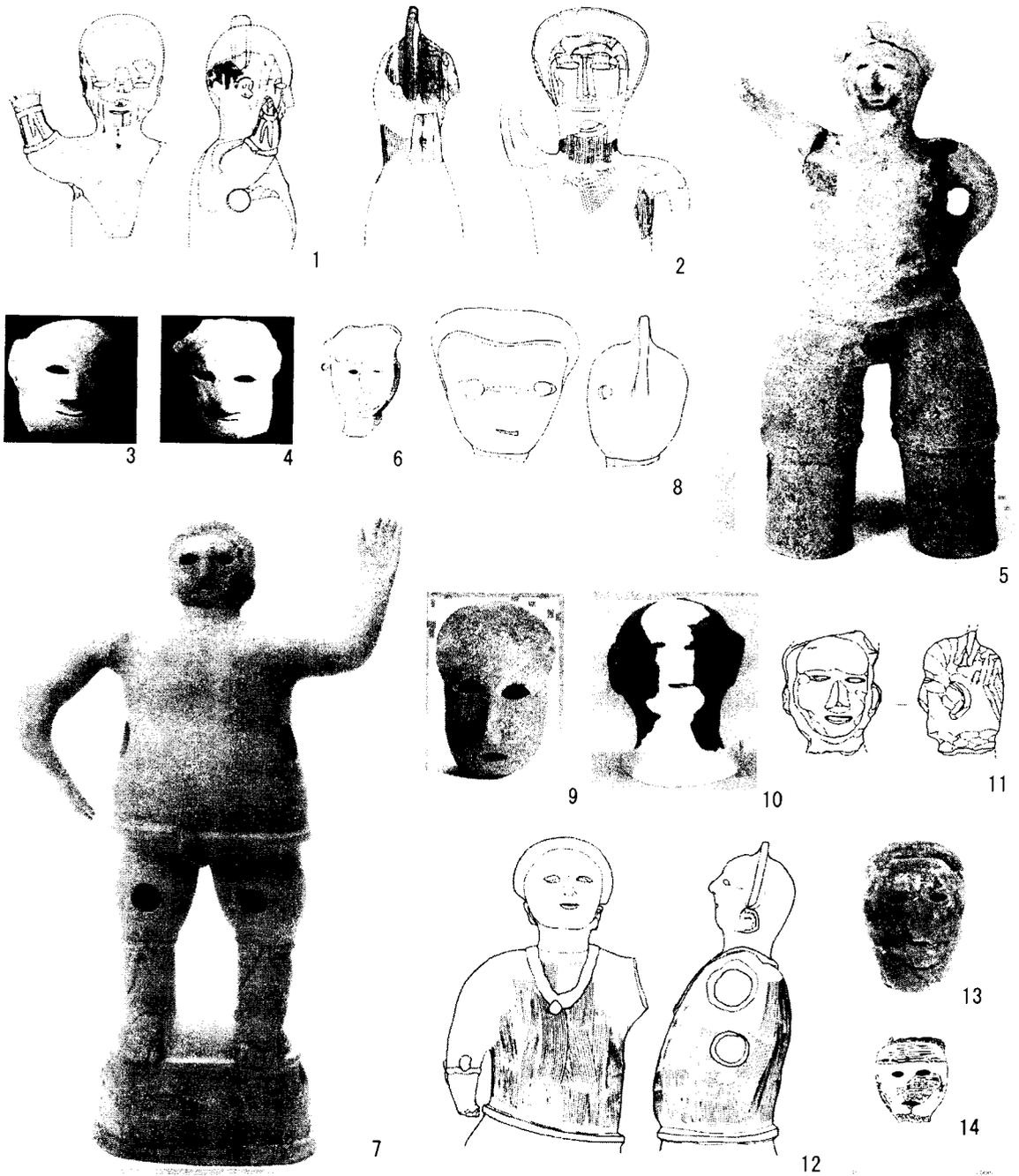
昼神車塚古墳は、全長56mの前方後円墳で、前方部の形象埴輪列内に扁平鬘の力士埴輪も配列される。扁平鬘の力士埴輪は、左腕を挙げて、右腕を下げる姿勢をとり、右腕に鈴付き飾り紐(手玉)を着け、首に粘土玉を付けた紐をかけている。

稲葉山10号墳は全長38mの前方後円墳で、頭部のみが出土する。

時期不明ではあるが、近畿地方の舳松南高田遺跡(大阪府堺市・埴輪製作址)⁽³⁸⁾、能登遺跡(奈良県桜井市・埴輪窯跡)⁽³⁹⁾といった埴輪生産関連遺跡からも、扁平鬘の力士埴輪の頭部の出土が知られている。

扁平鬘の力士埴輪は、5世紀後半を初現として、6世紀中頃まで造立されていたことが理解でき、I期の四条1・2号墳と保渡田Ⅶ遺跡、出土地不明の旧長瀨総合博物館所蔵、生産遺跡である舳松南高田遺跡や能登遺跡出土のものを除き、他は全て前方後円墳からの出土である。旧長瀨総合博物館所蔵のものも、前方後円墳から出土した可能性が高いといえよう。II期の今城塚古墳は大王墓(別格)であるが、他の前方後円墳は大小の規模差はあるものの、各地域の首長墓であることに違いはない。他の共通点としては、双脚立像⁽⁴⁰⁾で、裸に禪のスタイルが基本といえる。

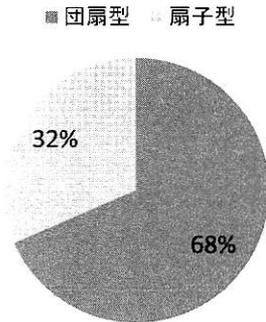
I期~II期初頭にかけての東日本地域から出土したものには、顔面等に赤彩が施される傾向が窺えるが、九州地方の中村双子塚古墳出土のものにも赤彩が見られる。顔面への入れ墨表現は、四条



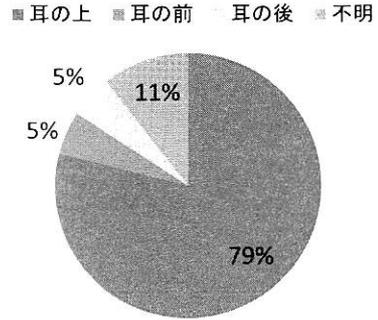
I期 1：四条2号墳 2：保渡田VII遺跡 3・4：四条1号墳 5：原山1号墳
 II期 6：三昧塚古墳 7：今城塚古墳 8：大谷山22号墳 9：帝釈寺4号墳 10：中村双子塚古墳 11：荒神森古墳
 12：昼神車塚古墳 13：舩松南高田遺跡 14：能登遺跡

図1 力士埴輪 (註11・23・24・29・30f・31a・33・34・36b・38・39文献から ※写真は縮尺不統一)

グラフ2 扁平髷の分類



グラフ3 扁平髷の位置



2号墳出土のものだけである。また、I期のものは右腕を挙げて左腕を下げる姿勢をとるが、II期のものは逆手で、左腕を挙げて右腕を下げる姿勢をとるといった傾向が指摘できる(図1)。このような片方の手を挙げて片方の手を下げ、両足を開いた姿勢の人物は、装飾古墳に描かれた人物図でも窺うことができる。しかしながら、装飾古墳に描かれた人物図では、明確に力士と断定できるものはないように思われる⁽⁴¹⁾。九州地方に存在する石人像は、人物埴輪に比べて大形であるが、岩戸山古墳(福岡県八女市)出土の力士像の頭部では、左右の耳から頭頂部を結ぶように横一文字の髷が削り出されており、扁平髷が表現されている⁽⁴²⁾。

扁平髷は、頭頂部を中心に横方向に粘土を扇状に貼り付けて成形されたものであるが、扇子状に表現されるものと、耳付近から頭頂部にかけて団扇状に表現されるものに別けられる。便宜的に前者を扇子型、後者を団扇型と呼びたい(図2)。圧倒的に団扇型の割合(68%)が多いことが指摘できる(表1・グラフ2)が、単なる成形技法の

違いまたは工人の違いとも考えられ、時期や性格の違いを指摘することは難しいようである。また、扁平髷を耳の位置を基準にして、①耳の上、②耳の前、③耳の後から表現されるものに分類できる(図3)。①が79%を占め、圧倒的に多いことが指摘できる(表1・グラフ3)。髷に施文が見られるものは、僅かではあるが3例見られる。特に中村双子塚古墳から出土したものは、円形刺突で表現が明確である。

(2) 力士埴輪の性格(図4・5)

次に、古墳での配列状況を検証し、力士埴輪の有する性格の検討を行いたい。

I期(5世紀)

四条2号墳(5世紀後半)は、藤原京の造営に伴って墳丘が削平されており、力士埴輪は、後円部東側の周溝(SD01)内から馬形等の動物埴輪とともに出土している。保渡田Ⅶ遺跡では、力士埴輪は6号溝から出土しており、数多く出土した形象埴輪群のうち人物埴輪を中心とした中心グル

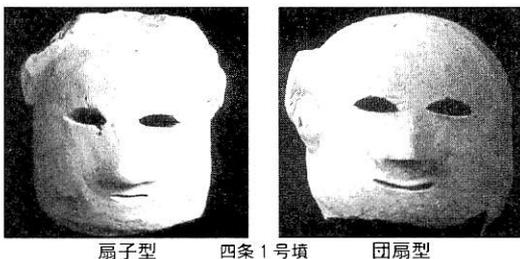


図2 扁平髷の形状分類(註11文献から)

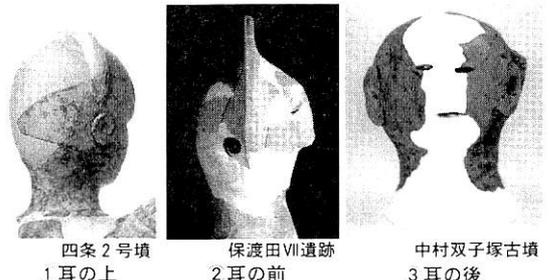
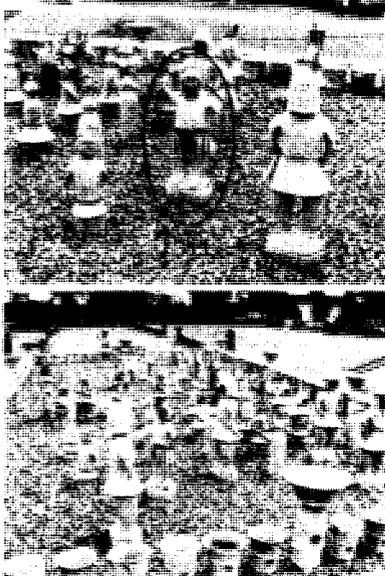
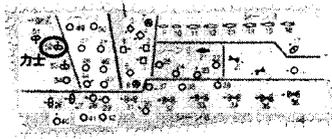


図3 扁平髷の位置分類(註11・23文献から作成)

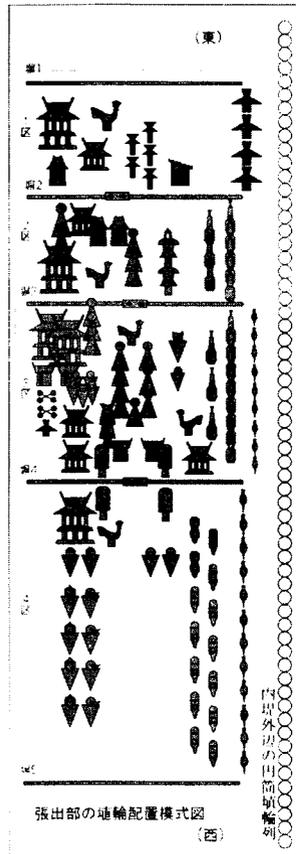


復原されたA区の埴輪群像

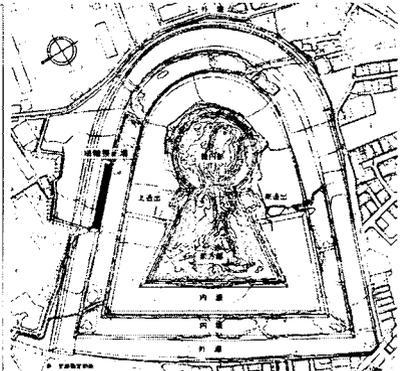


復原されたA区の配列

人物の群による儀礼場面・・・有力者が行う権威的な儀礼
 シーン1 座位群像 シーン2 立位群像
 II動物・人の群・・・有力者が行う権威的な儀礼
 シーン3 鳥の列(と置野の?)シーン4 雑賀の シーン5 猪飼いの
 III人物・器物による威儀(財物表示の礼・・・有力者が占有する財物
 シーン6 財物の列 シーン7 守護・威儀の列



今城塚古墳埴輪祭壇場と力士埴輪の配列



墳丘と埴輪祭壇場の位置



配列復原された力士埴輪

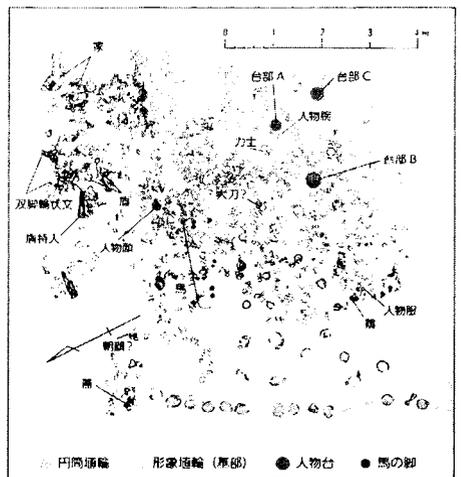
模式図凡例



保渡田八幡塚古墳内堤 A 区と力士埴輪の配列



大日山 35 号墳東側造り出しの配列復原された形象埴輪
写真中央が力士埴輪



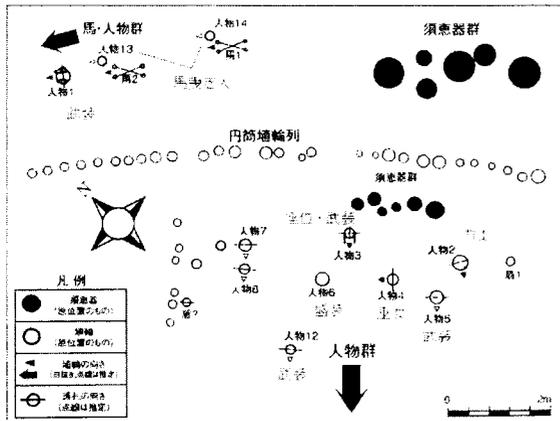
大谷山 22 号墳造り出しの形象埴輪配列

図 4 力士埴輪の配列状況① [I・II期] (註 11・30f 文献から・今城塚古墳と大日山 35 号墳の写真は筆者撮影)

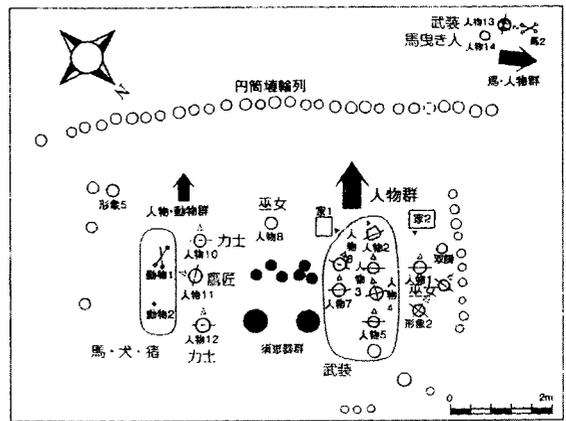
ープAを構成する一群と考えられている⁽⁴³⁾。

四条1号墳(5世紀末頃)も四条2号墳と同じく藤原京の造営に伴って墳丘が削平されており、

造り出し北西側の周溝内から他の人物埴輪や盾形等の器財埴輪、馬形等の動物埴輪とともに力士埴輪が出土している。保渡田Ⅶ遺跡から北東に約

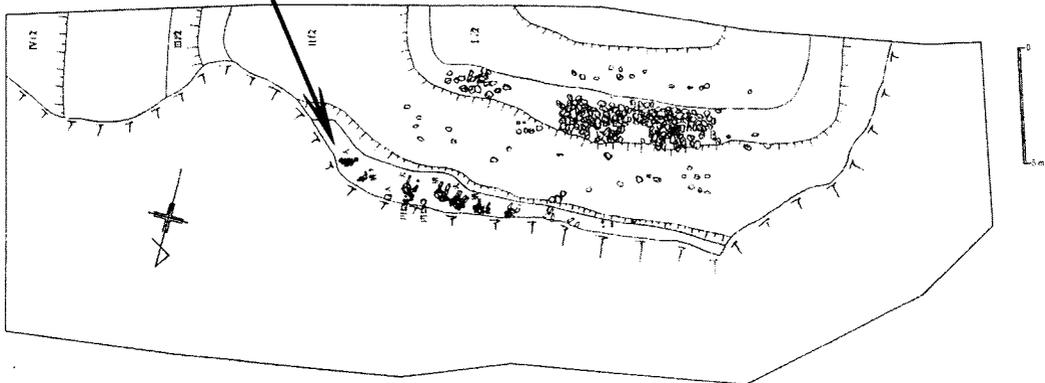


西側造り出し



東側造り出し

井辺八幡山古墳の形象埴輪群と力士埴輪の配列



屋神車塚古墳の形象埴輪群と力士埴輪の配列

図5 力士埴輪の配列状況②〔II期〕

(註 30f・36a 文献から・屋神車塚古墳の写真は筆者撮影・一部加筆)

350mに位置する全長188mの保渡田八幡塚古墳(群馬県高崎市)⁽⁴⁴⁾では、円筒埴輪で囲繞された内堤A区Ⅶ群(北西側)で、力士及び武人埴輪による配列復原がなされている(図4)。一方、原山1号墳の力士埴輪は、後円部南東側の周溝内から、盾持人物埴輪に隣接(東約1mの位置)して出土している。

形象埴輪群の配列復原がなされた保渡田八幡塚古墳の内堤A区の配列構成の検討では、Ⅶ群は「守護・威儀の列」として考えられており⁽⁴⁵⁾、原山1号墳では守護・癖邪・邪霊等の役割を象徴する盾持人物埴輪に隣接して、力士埴輪が出土していることから、力士埴輪が盾持人物埴輪の有する役割と同様の役割を担うものであったことが想像されている⁽⁴⁶⁾。

Ⅱ期 6世紀

三味塚古墳(6世紀初頭)では、後円部南側の墳丘裾部から人物・動物埴輪が集中して出土しており、力士埴輪もこの一群に含まれている。

今城塚古墳(6世紀前半)では、幅18mの内堤の北東側中央に長方形の張り出し(推定長65m×幅10m)が設けられて、200点を超える形象埴輪群が造立されている。この埴輪祭祀場と呼ばれる空間の4区(北西側)では、入母屋造りの高床の家と盾(器財埴輪)、武人と鷹匠(人物埴輪)、鶏(鳥形埴輪)、馬と牛(動物埴輪)のほかに水鳥(鳥形埴輪)が縦列され、人物埴輪と動物埴輪の間に力士埴輪が並列される(図4)。埴輪祭祀場の性格としては、王宮で行われた大王権継承儀礼である殯宮儀礼を表現したものと見解があり、力士埴輪の配列された4区は、「殯庭」と推定されている⁽⁴⁷⁾。今城塚古墳とはほぼ同時期の前方後円墳で、力士埴輪を含めた形象埴輪の配列実態の検証が行われている事例としては、大日山35号墳(和歌山県和歌山市)⁽⁴⁸⁾や大谷山22号墳、井辺八幡山古墳があげられる。大日山35号墳は、基壇を含む全長105mの前方後円墳である。東側の造り出し(円筒埴輪で囲繞)で、入母屋造りの高床の家と平屋の家(器財埴輪)が並び、その西側に人物埴輪、翼を広げた鷹とおぼしき鳥形埴輪、そして力

士埴輪、水鳥(鳥形埴輪)、犬や猪等の動物埴輪が配列される。また、東側の北寄りには、須恵器大甕が配置されている(図4)。大谷山22号墳では、南側に位置する造り出し(円筒埴輪で囲繞)で、他の人物埴輪とともに力士埴輪が配列されており、北西側には馬形埴輪の配列が見られる(図4)。井辺八幡山古墳では、西側造り出しと東側造り出しの両方で力士埴輪が配列されている。円筒埴輪で囲繞された区画内に、西側造り出しでは弓等を持つ人物(武人)や巫女等の人物埴輪と力士埴輪が配列され、力士埴輪に近い位置に盾形埴輪が配置されている。東側造り出しでは、力士埴輪に近い位置に鷹匠埴輪と鹿・猪形等の動物埴輪群の配列がみられる⁽⁴⁹⁾(図5)。井辺八幡山古墳の力士埴輪による相撲の場面を含めた人物埴輪群に関しては、近年、小笠原好彦が「亡き首長による祈年祭祀にともなった年中行事を追想して配置された」との見解を示しており⁽⁵⁰⁾、農耕儀礼等との関連も注視される。

各々の詳細な形象埴輪群の造立の実態には相違点が見られるが、6世紀前半に築造された前方後円墳では、大抵的には今城塚古墳の形象埴輪群の構成に類似した構成を呈することが理解でき、個々の古墳における力士埴輪の役割に相違はないと判断できる。

荒神森古墳の力士埴輪は、後円部側に設置された「3トレンチ周堤帯」からの出土で、中村双子塚古墳の力士埴輪は、後円部周溝内からの出土である。

6世紀中頃の昼神車塚古墳では、後円部北東側の墳丘裾部に力士埴輪と盾形と考えられる埴輪が配列され、さらにその西側に犬・猪といった動物埴輪が列となって配置されている(図5)。稲葉山10号墳では、括れ部南側の前方部寄りの位置から巫女・弹琴・武人等の人物埴輪とともに力士埴輪が出土している。

I期からⅡ期前半にかけて、墳丘を舞台とした形象埴輪群による演出が盛大となり、個々の古墳での造立にあたっては、演出の詳細に相違が見られるが、大抵的にはI期の保渡田八幡塚古墳や原

山1号墳とⅡ期の今城塚古墳や大日山35号墳・井辺八幡山古墳等での力士埴輪の有する性格の相違はないように判断できる。全ての時期を通じて、力士埴輪の有する性格の特質（守護・癩邪の役割）に大きな違いはないものと考えられ、前方後円墳等の首長墓を中心とした配列の実態からは、力士が首長の配下に属する部民であったことが理解できる。

また、古墳での配列状況の検証からは、豊穰をもたらす農耕儀礼としての性格を明確に見いだすことはできなかった。

(3) 高句麗壁画古墳の力士図（図6～9）

最後に、朝鮮半島の高句麗壁画古墳で描かれた力士図について、その内容を述べたうえで、頭髮を中心とした検証を行いたい。

高句麗が二番目に都を置いた集安（中国吉林省集安市）と、三番目に都を置いた平壤周辺（北朝鮮黄海南道安岳郡・平安南道南浦市）では、壁画古墳が多く築かれている⁽⁵¹⁾。高句麗壁画古墳の力士図は、角抵図及び手搏図のほかに、石室の天井を支える力士図（以下、天井を支える力士図と呼ぶ）がある⁽⁵²⁾。

角抵図は、集安の角抵塚古墳（4世紀末頃）⁽⁵³⁾で描かれている。一辺約15mの方台形の墳丘を有する角抵塚古墳は、石室は前室と奥室（玄室）によって構成される二室墓で、奥室の右側壁に角抵

図が描かれている。柱と斗栱、梁が描かれた側壁の中央に樹木が描かれ、その右側に裸身に禪をつけた二人の力士が角抵する姿と、さらにその右側に杖をもって見守る白髪で長い髭を生やした男の姿が描かれている。角抵は、神聖な行事とも理解され、葬送儀礼の一場面を示しているという考え方もある⁽⁵⁴⁾。角抵する二人の力士は、頭頂部で髪を結び上げて上部に突出させているような髪型である（図6）。

角抵図に類似する手搏図は、集安の舞踊塚古墳（4世紀末頃～5世紀初頭）⁽⁵⁵⁾、平壤周辺の安岳3号墳（4世紀後半）⁽⁵⁶⁾で描かれている。一辺約17mの方台形墳である舞踊塚古墳では、二室墓である石室の奥室（玄室）天井の奥側に手搏図が描かれている。左右に大きな蓮の花が描かれた真



角抵塚古墳奥室右側壁

図6 高句麗壁画古墳の角抵図（註53b文献から）



舞踊塚古墳奥室天井



安岳3号墳前室東側室

図7 高句麗壁画古墳の手搏図（註53b・e文献から）

の中に、裸身に禪をつけた二人の力士が腰を低くした姿勢で向き合って描かれている。二人の力士は、頭頂部から後頭部にかけて髪を結い上げてひとまとめにしたような髪型である。一方、一辺約30～33mの方台形墳である安岳3号墳で

は、複雑な構造を呈する石室の前室東側室の入り口南側上段に手搏図が描かれている。裸身に禪をつけた二人の力士が上下に腕を広げたような姿勢で向き合って描かれている。前2例と比べて明確ではないが、二人の力士は、頭頂部付近で髪を結



三室塚古墳第2室北壁



三室塚古墳第3室北壁



長川1号墳前室天井



大安里1号墳奥室



通溝四神塚古墳玄室北西壁

図8 高句麗壁画古墳の石室天井を支える力士図 (註53b・c・e文献から)

い上げてひとまとめにしたような頭髪と想定される(図7)。

次に天井を支える力士図を見ていきたい。天井を支える力士図は、集安の三室塚古墳(5世紀初頭)⁽⁵⁷⁾や長川1号墳(5世紀中頃)⁽⁵⁸⁾、平壤周辺の大安里1号墳(5世紀末頃)⁽⁵⁹⁾などで描かれている。直径約18m程度の円形墳と考えられる三室塚古墳は、名称のとおり石室が3室あって、羨道と通路で鉤形状に繋がっている。第2室と第3室(玄室)の壁面に、腰を低く落として手足を開いた同じ姿勢で、重い天井の梁を渾身の力をこめて支える力士が描かれる。髭を生やした風貌で、裸体ではなく衣服を着ており、結び紐の存在から冠帽の装着が指摘⁽⁶⁰⁾されているが、頭部の表現はよくわからない。天井を支える力士図は一種の守護神的役割を担うものとして理解されている⁽⁶¹⁾。前室と奥室(玄室)によって構成される石室内の壁画に菩薩像など仏教の影響が強く見られる長川1号墳では、前室の天井隅に、手足を開いて腰を落とした姿勢で重い天井を支える力士が上下段に描かれる。髭を生やした風貌で、上半身のみ裸である。頭髪は、明らかではないが、状態が良好な下段力士では左右の耳の上から横長に髪を結ったように見え、上段の力士も同様であった可能性が考えられる。一辺約19.5~22.5mの方台形墳である大安里1号墳では、壁画が剥落して状態は悪いが、前室と奥室(玄室)によって構成される奥室の四壁の隅に、手足を開いて腰を落とした姿勢で重い天井を支える力士が描かれている。禪だけをまとった裸体で、頭髪は髪をまきあげて髻を結っている(図8)。

天井を支える力士図に関しては、5世紀初頭~末頃にかけて三室塚古墳→長川1号墳→大安里1号墳といった築造編年が考えられ(図9)、その姿勢及び性格は同一ながらも三室塚古墳では衣服・冠帽といった表現であったものが、長川1号墳及び大安里1号墳では半裸で頭髪は結髪となったことが理解できる。天井を支える力士図は、6世紀に入ると奇怪な人物・獣類などが描かれた集安の一辺約27.0mの方台形墳である通溝四神塚古

墳⁽⁶²⁾において、怪異な容姿を呈する人物図への変容を見ることができ(図8・9)が、守護神(癡邪)としての性格に差異は見られない⁽⁶³⁾。

4世紀後半~5世紀初頭の壁画古墳で描かれた角抵図及び手搏図は、従来の研究でも日本の相撲を考察する上で比較対象として扱われてきた。禪の形態に若干の差異は認められるが、いずれも禪のみを着けた半裸身で、頭髪は結び上げてひとまとめにしたようなものであることが共通点である。5世紀初頭の壁画古墳で描かれた天井を支える力士図では、衣服・冠帽表現であった力士が、5世紀中頃~末頃には、半裸身で頭髪は結髪として描かれるようになり、角抵図及び手搏図の表現に類似するように描かれている。5世紀中頃~末頃になると、禪に半裸身で結髪が、力士の特性として指摘できる。

また、長川1号墳及び大安里1号墳の力士図で描かれた正面からの頭髪表現は、まさに力士埴輪の扁平鬘と酷似するものとして指摘できる。

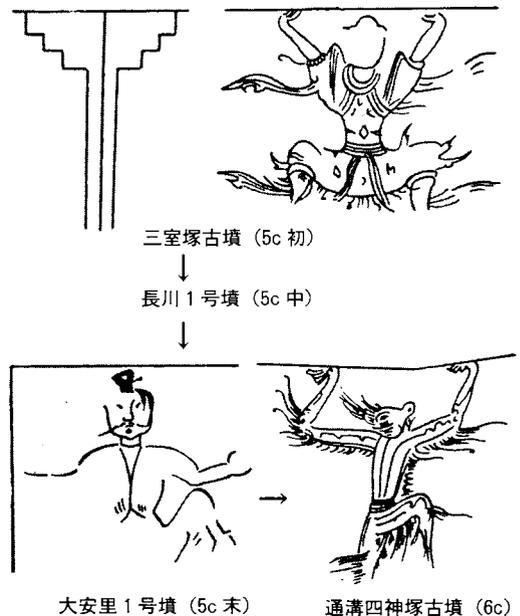


図9 天井を支える力士図の変遷(註53a文献に加筆)

4 結論—共通点による扁平髻の解釈—

日本の力士埴輪のほとんどが、大小の差こそあれ円墳を除いた前方後円墳や帆立貝式古墳等の首長墓での儀礼等の場面を演出（配列）していることは、力士が首長の配下に属する部民であったからであると理解できる。大王墓の埴輪祭祀場での配列実態が明らかになっている今城塚古墳からは、力士は、武人や鷹匠と同等程度の身分的位置付けがなされていたことが想像できる。さらに、保渡田八幡塚古墳や原山1号墳等での力士埴輪の配列実態からは、守護・瘵邪の特質を有していたことが想定でき、高句麗壁画古墳の天井を支える力士図との共通点を窺うことができる。古墳の埴輪祭祀場での祭礼は、生前の被葬者の権力と財力の誇示ともいえ、高句麗壁画古墳の石室内で描かれた生活民俗図とも共通点があるといえる。

本論での力士埴輪と高句麗壁画古墳に描かれた力士図の比較検討の結果からは、力士埴輪の特性として指摘できる禪のみの半裸身の容姿に関しては、高句麗壁画古墳の角抵図と手搏図及び大安里1号墳の天井を支える力士図との共通点であることが理解できた。力士埴輪の頭髪で表現される扁平髻に関しては、高句麗壁画古墳の角抵図及び手搏図では頭髪は結髻で、天井を支える力士図では

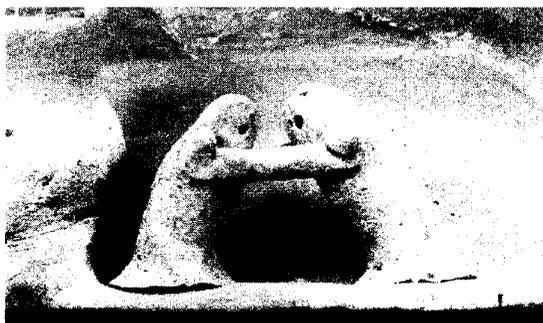
三室塚古墳を除いた長川1号墳と大安里1号墳が結髻で、正面から描かれた力士図の結髻は、力士埴輪の扁平髻を正面から見たのと酷似する頭髪として理解できた。したがって、5世紀中頃～末頃の高句麗の力士と5世紀後半～6世紀（古墳時代中期～後期）の日本の力士の共通点として、禪のみの半裸身の容姿で、頭髪は結髻であったことが理解できた。

高句麗壁画古墳以前の中國大陸における力士図に関しては、秦代（紀元前3世紀末）の鳳凰山秦墓（中国湖北省江陵县）出土の木製篋に描かれた漆絵や、後漢末頃（2世紀後半～3世紀初頭）の打虎亭2号漢墓（中国河南省密県）の壁画等が知られている⁽⁶⁴⁾（図10）。江陵鳳秦墓の漆絵と打虎亭2号漢墓の壁画はともに半裸体で禪状の容姿ではあるが、組合ってはいないので手搏図とも考えられるが、その髪型は髻のように束ねたものであることが理解できる。高句麗壁画古墳以前の力士図においても、容姿等の共通点が窺え、森貞次郎が指摘したように力士の系譜は、広く東アジア世界での伝播を考えざるを得ない⁽⁶⁵⁾。

文献史料からは相撲の渡来や力士の頭髪に関する記述は見られず、力士埴輪以外の力士に関連する考古資料である装飾付須恵器壺の格闘像（相撲小像）でも髪型の表現は見られない⁽⁶⁶⁾（図11）が、



1 鳳凰山秦墓の木製篋漆絵
2 打虎亭2号漢墓の壁画



野口1号墳（鳥取県倉吉市）

図11 装飾付須恵器壺の格闘像（註11文献から）

本論で比較検討を行った力士埴輪と高句麗壁画古墳の角抵図と手搏図及び力士図からは、禪に半裸身といった容姿の共通点のほかに、扁平鬘といった頭髪表現に渡来文化としての根拠が見いだせるものと考えられる。古墳時代の服飾分析に関しては、その大部分が朝鮮半島の系譜下で成立したものと指摘⁽⁶⁷⁾もあり、力士に関しては衣服（禪）とともに扁平鬘こそが、渡来芸能であることを反映していると考えられる。相撲の起源を絵画等の資料を中心に検討した羅時銘・新井節男の見解でも、中国相撲が日本へと5世紀代に伝播したことが指摘⁽⁶⁸⁾されており、日本の力士及び相撲の系譜を中国及び朝鮮半島に求めることに異議はないものと考えられる。

四条2号墳での顔面に施された入れ墨の表現からも、力士の扁平鬘の表現は、仮面（袋状の被り物）でないことは確かといえよう。仮面（袋状の被り物）説の根拠のひとつとして指摘されている中村双子塚古墳の力士埴輪の頭髪に見られる円形刺突による施文⁽⁶⁹⁾は、解釈次第ではあるが、髪留め等の表現とも理解できるのではないだろうか。扁平鬘に、革製品の可能性を見いだそうとする意見も否定せざるを得ないと思う。

5 おわりに

古墳時代の研究では、古墳に副葬された甲冑や馬具・装身具等といった出土遺物の分析において、朝鮮半島や中国大陸との関係を切り離して考える

ことはできない⁽⁷⁰⁾。力士は、元々は強力の者の呼称と考えられるが、本論では従前より指摘されてきた禪に半裸身といった容姿のほかに、扁平鬘に渡来文化としての特質があることを導き出し、渡来芸能の根拠のひとつであることを指摘した。

奈良時代の建立（7世紀後半～8世紀初頭）である法隆寺（奈良県斑鳩町）の五重塔では、斗拱を支える力士像と邪鬼像⁽⁷¹⁾が見られ（図12）、その力強い容姿は、まさに高句麗壁画古墳の三室塚古墳や長川1号墳・大安里1号墳などで石室の天井を支える力士図と共通する要素といえる。法隆寺中門には、711（和銅4）年造立の金剛力士像があり、金剛力士は、神通力を持って外敵を打ち払うといった性格を有するものである。力士の有する守護・瘴邪の特質は、奈良時代以降も継承され、日本文化の中で定着している。

現代の大相撲でも、十両以上の力士（関取）の

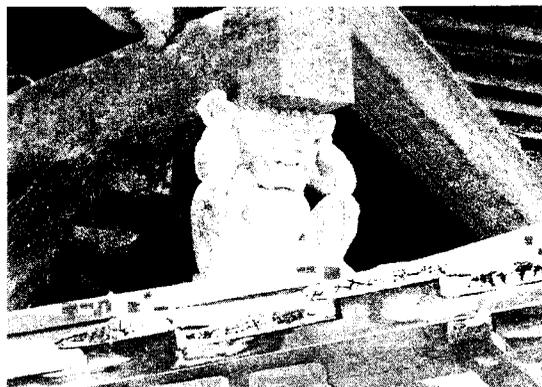


図12 法隆寺五重塔の邪鬼像（筆者撮影）



第35代横綱・双葉山

図13 大銀鬘鬘（双葉の里にて筆者撮影）

頭髮は、床山が結った「大銀杏」で、髻が力士（関取）の象徴となっている（図13）。

今後も渡来文化が果たした歴史的意義の追究に努めていきたい。

【註】

- 1) 亀田康範ほか編『すまひ・角力・相撲』石川県立歴史博物館, 1991.
- 2) 森浩一ほか『井辺八幡山古墳』同志社大学文学部文化学科内考古学研究室, 1972.
- 3) 青木豊「力士埴輪」『國學院大学考古学資料館紀要』第3号, 國學院大学考古学資料館, 1987, pp.237~238.
- 4) 森貞次郎「角抵源流考」『日本民族・文化の生成－永井昌文教授退官記念論文集1巻－』六興出版, 1988, pp.617~632.
- 5) 塚田良道「力士埴輪の系譜について」『同志社大学考古学シリーズⅣ 考古学と技術』同志社大学考古学シリーズ刊行会, 1988, pp.201~214.
- 6) 紀伊風土記の丘管理事務所編・発行『はにわ一埴輪と古墳時代―』, 1991.
- 7) 山内紀嗣「古墳時代の角力」『國分直一博士米寿記念論文集 ヒト・モノ・コトバの人類学』慶友社, 1996, pp.592~602.
- 8) 鈴木徹「古墳時代の力士像と相撲考」『三河考古』第7号, 三河考古談話会, 1994, pp.97~120.
- 9) 亀井正道「人物・動物はにわ」『日本の美術』第346号, 至文堂, 1995.
- 10) 駒宮史朗「力士埴輪考」『幸魂－増田逸朗氏追悼論文集－』北武蔵古代文化研究会, 2004, pp.85~112.
- 11) 清水豊編『力士の考古学』かみつけの里博物館, 2008.
- 12) 若松良一「鎮魂の芸能者―相撲人―」『力士の考古学』かみつけの里博物館, 2008, pp.43~51.
- 13) 川崎保「力士形埴輪と北東アジア角抵力士像との対比と考察」『同志社大学考古学シリーズⅩ 考古学は何を語るのか』同志社大学考古学シリーズ刊行会, 2010, pp.219~228.
- 14) a. 門田誠一『高句麗壁画古墳と東アジア』思文閣出版, 2011.
b. 新山保和「力士埴輪の一考察」『かながわ考古学論集－有志職員によるかながわ考古学財団20周年記念誌－』かながわ考古学論集刊行会, 2014, pp.111~120.
- 15) a. 長谷川明『相撲の誕生（新潮選書）』新潮社, 1993.
b. 長谷川明『相撲の誕生（定本）』青弓社, 2002.
- 16) 富加見泰彦「井辺八幡山古墳出土力士埴輪の再検討」『郵政考古紀要』第47号, 大阪郵政考古学会, 2009, pp.36~48.
- 17) 内田律雄「加茂岩倉銅鐸の海亀」『銅鐸の中の動物たち』荒神谷博物館, 2010, pp.33~36.
- 18) 辻川哲朗「井辺八幡山古墳出土「力士埴輪」に関する一考察」『古代史の海』第61号, 「古代史の海」の会, 2010, pp.15~30.
- 19) 註1に同じ。
- 20) 『日本書紀』の読み下し及びその解釈は、小島憲之ほか『新編日本古典文学全集3 日本書紀①~③』小学館, 1996, を参考にした。
- 21) 註2に同じ。
- 22) 註11に同じ。
- 23) 鈴木裕明ほか『四条遺跡Ⅱ』奈良県立橿原考古学研究所, 2010.
- 24) 若狭徹『保渡田Ⅶ遺跡』群馬町教育委員会, 1990.
- 25) 若狭徹ほか「史跡保渡田古墳群井出二子山古墳」高崎市教育委員会, 2009.
- 26) 西藤清秀・林部均「橿原市四条遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報（第二分冊）1987年度』奈良県立橿原考古学研究所, 1990, pp.289~327.
- 27) 辻秀人ほか『原山1号墳発掘調査概報』福島県教育委員会, 1982.
- 28) 註9に同じ。
- 29) 斎藤忠・大塚初重ほか「三味塚古墳」茨城県教育委員会, 1960.
- 30) a. 三方町縄文博物館編・発行『よみがえるハニワ工場－高槻市の埋蔵文化財展－』, 2001.
b. 高槻市教育委員会編・発行『史跡・今城塚古墳―平成13年度・第5次規模確認調査―』, 2002.
c. 高槻市教育委員会編・発行『史跡・今城塚古墳―平成14年度・第6次規模確認調査―』, 2004.
d. 鐘ヶ江一朗ほか『発掘された埴輪群と今城塚古墳』, 高槻市教育委員会・高槻市立しろあと歴史館, 2004.
e. 森田克行『よみがえる大王墓 今城塚古墳』新泉社, 2011.
f. 荻野谷正宏ほか『大王の埴輪・紀氏の埴輪―今

- 城塚と岩橋千塚—』和歌山県立紀伊風土記の丘, 2011.
- g. 高槻市教育委員会編・発行『今城塚古代歴史館常設展示図録(改訂版)』, 2012
- 31) a. 末3永雅雄・森浩一ほか『岩橋千塚』関西大学文学部考古学研究室, 1967.
- b. 和歌山県立紀伊風土記の丘編・発行『平成20年度特別展 岩橋千塚』, 2008.
- c. 註30f.に同じ。
- 32) 註 2に同じ。
- 33) 中原義史・瓜生由起『ふくい発掘最前線』福井県立博物館, 1998.
- 34) 関川妥『荒神森古墳2—第2次・3次・4次調査—』北九州市教育委員会, 2007.
- 35) a. 山口健剛「6世紀前半の大量の埴輪—熊本県中村双子塚古墳」『季刊考古学』第84号, 雄山閣, 2003, pp.89~90.
- b. 山鹿市立博物館編・発行『山鹿市立博物館収蔵品 図録』, 2015.
- 36) a. 昼神車塚古墳調査会編・発行『昼神車塚古墳発掘調査概要(現地説明会資料)』, 1978.
- b. 富成哲也「大阪府昼神車塚古墳」『日本考古学年報(1976年版)』29, 日本考古学協会, 1978, pp.64~67.
- 37) a. 福知山市史編さん委員会編『福知山市史』第1巻, 福知山市役所, 1976.
- b. 石井清司「稲葉山10号墳」『丹波の古墳1由良川流域の古墳』, 山城考古学研究会, 1983, pp.81~87.
- 38) 堺市役所編・発行『堺市史第1巻本編第1』, 1929.
- 39) 松本俊吉「大和國櫻井町烏見山麓発見の埴輪出土遺跡及び窯址」『考古学雑誌』第27巻第4号, 日本考古学会, 1937, pp.49~52.
- 40) 人物埴輪は, 双脚全身像(立像と座像)と無脚半身像に分類できる。
- a. 水野正好「埴輪の世界」『日本原始美術大系3土偶・埴輪』講談社, 1977, pp.172~187.
- 水野正好は, この分類(相違)について, 社会構成(地位)の反映と指摘した。
- b. 塚田良道『人物埴輪の文化史的研究』雄山閣, 2007.
- 41) 九州地方の五郎山古墳(福岡県筑紫野市・6世紀後半)の玄室奥壁上段に描かれた人物図は, 手のひらを広げた右腕を挙げて, 左手を腰にあて, 両足を開いており, 力士との指摘があるが(註11文献), 黒で描かれた全体に対して下半身の輪郭だけが赤で描かれており, 力士を描いたものかどうかは明確には解らないものと考えられる。
- 参考文献として, 小田富士雄ほか『国史跡 五郎山古墳—保存整備事業に伴う発掘調査—』筑紫野市教育委員会, 1998.
- 東北地方の清戸迫76号横穴墓(福島県双葉町・7世紀前半)の玄室奥壁に描かれた人物図も力士との指摘があるが(註11文献), その姿勢は左手を挙げて右手を腰にあてるが, 冠帽又は兜に美豆良, 膝の下を絞った袴と履をはく容姿からは, 力士を描いたものとは考えがたい。
- 参考文献として, 斎藤忠「古墳文化と壁画」『斎藤忠著作選集』第3巻, 雄山閣出版, 1997, pp.145~260.
- 42) 今西康宏「人物の造形—力士—」『高槻市立今城塚古代歴史館開館5周年記念特別展 継体大王と筑紫君磐井』高槻市立今城塚古代歴史館, 2016, pp.30~31.
- 43) 註24に同じ。
- 44) 若狭徹・田辺芳昭ほか『保渡田八幡塚古墳』群馬町教育委員会, 2000.
- 45) 註44に同じ。
- 46) 註11に同じ。
- 47) 註30e.に同じ。
- 48) a. 註30f.に同じ。
- b. 和歌山県立紀伊風土記の丘編・発行『特別展記念シンポジウム資料集 大王の埴輪・紀氏の埴輪—今城塚と岩橋千塚—』, 2011.
- 49) a. 国立歴史民俗博物館編『はにわ—形と心—図録』朝日新聞社, 2003.
- b. 佐藤純一・清水邦彦・関真一・辻川哲朗・松田度「井辺八幡山古墳の再検討—造り出し埴輪群の配置復原を中心に—」『同志社大学歴史資料館館報』第10号, 同志社大学, 2007, pp.13~34.
- c. 註30f.に同じ。
- 50) 小笠原好彦「日本の古墳に配列された形象埴輪と中国の明器と甕」『日本古代学』第6号, 明治大学日本古代学研究所, 2014, pp.31~53.
- 51) a. 東潮・田中俊明『高句麗の歴史と遺跡』中央公論社, 1995.
- b. 東潮『高句麗考古学研究』吉川弘文館, 1997.
- c. 全虎兌「古墳壁画と高句麗文化」『高句麗の文

化と思想』明石書店, 2013, pp.307~324.

高句麗壁画古墳は、高句麗の支配者階層の墓である。

- 52) 朝鮮民主主義人民共和国社会科学院考古学研究所編(呂南喆・金洪圭訳)『高句麗の文化』同朋舎出版, 1982.

手搏図は、離れた相手を拳で打ち倒す拳法として理解される。

本文では、共同通信社編・発行『高句麗壁画古墳』, 2005. に準拠して角抵図・手搏図・力士図に大別して取り扱った。

- 53) a. 朱栄憲(有光教一監修・永島暉臣慎訳)『高句麗の壁画古墳』学生社, 1972.
b. 池内宏・梅原末治『通溝』巻下, 日満文化協會, 1973.
c. 朝鮮画報社出版部編『高句麗古墳壁画』朝鮮画報社, 1985.
d. 読売テレビ放送編『好太王碑と集安の壁画古墳』木耳社, 1988.
e. 共同通信社編・発行『高句麗壁画古墳』, 2005.
- 54) 斎藤忠「高句麗古墳壁画にあらわれた葬送儀礼について」『東アジア葬・墓制の研究』第一書房, 1987, pp.473~484.
- 55) a. 高句麗文化展実行委員会編・発行『高句麗文化展』, 1985.
b. 註53b.~e.に同じ。
- 56) 註53c.・e.と註55a.に同じ。
- 57) 註53b.に同じ。
- 58) 註53c.・e.に同じ。

陳相偉・方起東「集安長川一号壁画墓」『吉林集安高句麗墓葬報告集(吉林省文物考古研究所編著)』科学出版社, 2009, pp.65~85.

長川1号墳では、前室北壁の上部隅に、二人の力士による角抵図が見られるが、髪型などの詳細は不明である。

- 59) 註53a.・c.に同じ。
- 60) 金基雄『朝鮮半島の壁画古墳』六興出版, 1980.
- 61) 註60に同じ。
- 62) 註60に同じ。
- 63) 註53a.に同じ。
- 64) 註4・5・10と註15a.・b.に同じ。
- 65) 註4に同じ。
- 66) 註11に同じ。
- 67) 金東旭「古代韓日両国の服飾文化」『〈比較〉古代日本と韓国文化(下)』学生社, 1980, pp.229~

269.

- 68) 羅時銘・新井節男「中国と日本の相撲の伝播的関係についての検討—相撲は中国から日本に伝播した—」『スポーツ科学・健康科学研究』創刊号, 関西学院大学, 1998, pp.67~78.
- 69) 註12に同じ。
- 70) a. 福岡県教育委員会編『九州における古墳文化と朝鮮半島』学生社, 1989.
b. 岩崎卓也・中山清隆ほか「特集 古墳時代の日本と中国・朝鮮」『季刊考古学』第33号, 1990, pp.14~88.
- 71) 宮田充「日本の仏教彫刻における鬼神像に関する一考察—仏殿軒下の邪鬼像を中心に—」『龍谷大学大学院文学研究科紀要』第32集, 龍谷大学, 2010, pp.91~108.